武蔵野日曜聖書講筵

パウロのエペソ教会訣別の辞

――使徒行伝第20章――

１９９１年11月17日
小池辰雄

第三次伝道後半　エペソ教会へ別れの挨拶　教会は十字架と聖霊による　詩「愛の使徒」賀川豊彦

【使徒20】

1 騒乱のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勧(すすめ)をなし、之に別(わかれ)を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。2 而して、かの地方を巡り多くの言をもて弟子たちを勧めし後、ギリシヤに到る。3 そこに留まること三个月(か)にしてシリヤに向かいて船出せんとする時、おのれを害(そこな)わんとするユダヤ人の計略(はかりごと)に遭いたれば、マケドニヤを経て帰らんと心を決(さだ)む。4 之に伴える人々はベレヤ人にしてプロの子なるソパテロ、テサロニケ人アリスタルコ及びセクンド、デルベ人ガイオ及びテモテ、アジヤ人テキコ及びトロピモなり。5 彼らは先立ちゆき、トロアスにて我らを待てり。6 我らは除酵祭(じょこうさい)の後、ピリピより船出し、五日にしてトロアスに著(つ)き、彼らの許に到りて七日のあいだ留まれり。7 一週(ひとまわり)の首(はじめ)の日われらパンを擘(さ)かんとて集まりしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、夜半(よなか)まで語り続けたり。8 集まりたる高楼(たかどの)には多くの燈火(ともしび)ありき。9 ここにユテコという若者窓によりて坐しいたるが、いたく眠気ざすほどに、パウロの語ること愈々(いよいよ)久しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶(たす)け起こしたるに、はや死にたり。10 パウロ降りて其の上に伏し、かき抱きて言う『なんじら騒ぐな、生命はなお内にあり』11 すなわち復(また)のぼりてパンを擘き、食してのち久しく語りあい、夜明に至り遂に出でたてり。12 人々かの若者の活きたるを連れきたり、いたく慰籍(なぐさめ)を得たり。

13 斯(かく)て我らは先立ちて船に乗り、アソスにてパウロを載せんとして彼処に船出せり。14 我らアソスにてパウロを待ち迎え、これを載せてミテレネに渡り、15 また彼処より船出して翌日キヨスの彼方にいたり、次の日サモスに立ち寄り、その次の日ミレトに著(つ)く。16 パウロ、アジヤにて時を費さぬ為にエペソには船を寄せずして過ぐることに定めしなり。これは成るべく五旬節(ごじゅんせつ)の日にエルサレムに在ることを得んとて急ぎしに因る。

17而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教会の長老たちを呼びて、
18その来りし時、かれらに言う『わがアジヤに来りし初の日より如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。19即ち謙遜の限をつくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、20益となる事は何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教え、
21ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。22視よ、今われは心搦められて、エルサレムに往く。彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難と我を待てりと告げたもう。24然ど我わが走るべき道程と主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には固より生命をも重んぜざるなり。25視よ、今われは知る、前に汝らの中を歴巡りて御国を宣伝えし我が顔を汝ら皆ふたたび見ざるべきを。26この故に、われ今日なんじらに証す、われは凡ての人の血につきて潔よし。27我は憚らずして神の御旨をことごとく汝らに告げしなり。28汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、聖霊は汝らを群のなかに立てて監督となし、神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。29われ知る、わが出で去るのち暴き豺狼なんじらの中に入りきたりて群を惜まず、30又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。31されば汝ら目を覚しおれ。三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを覚えよ。32われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業を受けしめ得るなり。33我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。34この手は我が必要に供え、また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。
35我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり』
36斯く言いて後、パウロ跪づきて一同とともに祈れり。37みな大いに歎きパウロの頚を抱きて接吻し、38そのふたたび我が顔を見ざるべしと云いし言によりて特に憂い、遂に彼を船まで送りゆけり。

●第三次伝道後半

パウロの第三次伝道が今日で終わるわけです。第三次伝道というのは、一番パウロが力をこめた伝道で、行程距離も一番長い。ギリシヤの所は二度、往復していますから。19章では、大女神アルテミスのことでゴタゴタした。デメテリオという銀細工人のところ

ですね。要するに、パウロはエペソに相当長く居たけれども、エペソの氏神みたいな大女神を皆拝んでいるものだから、福音の伝わり方がなかなか困難だったようです。でも、エペソ滞在は非常に長くて、大事な伝道ではあった。後で、ヨハネが行って、やったわけです。

20章に来まして、

1騒乱のやみし後、パウロ弟子たちを招きて勧(すすめ)をなし、之に別(わかれ)を告げ、マケドニヤに往かんとて出で立つ。2而して、かの地方を巡り多くの言をもて弟子たちを勧めし後、

多分、コリント後書を書いたんです。それで、そこの方へ出掛けて行った。第二回の旅行の時に、コリントに行っていますから。コリントで三か月居て、そこでパウロはローマ書を書いたのだろうと言われています。使いをやったわけですね。

ギリシヤに到る。3そこに留まること三个(か)月にしてシリヤに向かいて船出せんとする時、おのれを害(そこな)わんとするユダヤ人の計略(はかりごと)に遭いたれば、マケドニヤを経て帰らんと心を決(さだ)む。4之に伴える人々はベレヤ人にしてプロの子なるソパテロ、

これは17章に出てくる。

テサロニケ人アリスタルコ

これも19章に出てきます。

及びセクンド、デルベ人ガイオ

これはロマ書16章に出ている。

及びテモテ、

これは有名な弟子ですね。

アジヤ人テキコ及びトロピモなり。

トロピモというのはエペソ人らしいね。

5彼らは先立ちゆき、トロアスにて我らを待てり。

「我ら」という言い方は、所々で出てくる。20章の初めの方はみな「我ら」という言い方で、もちろんルカが一緒にいたわけです。

6我らは除酵祭(じょこうさい)の後、ピリピより船出し、五日にしてトロアスに著(つ)き、彼らの許に到りて七日のあいだ留まれり。

7一週(ひとまわり)の首(はじめ)の日

ユダヤ人は「一週のはじめの日」というと、金曜日の夕方から始まるわけです。

われらパンを擘(さ)かんとて集(あつま)りしが、パウロ明日いで立たんとて彼等とかたり、

「夕あり、朝あり」

とあるので、ユダヤ人は夕方から始まるから、夜を通すことが多いんだね。

夜半(よなか)まで語り続けたり。8集りたる高楼(たかどの)には多くの燈火(ともしび)ありき。9ここにユテ

コという若者窓によりて坐しいたるが、いたく眠気ざすほどに、パウロの語ること愈々久しくなりたれば、遂に熟睡して三階より落つ。これを扶け起こしたるに、はや死にたり。10パウロ降りて其の上に伏し、

これは、エリヤやエリシャがやったやり方でしたね。上から身体を重ねて暖めるんです。

かき抱きて言う『なんじら騒ぐな、生命はなお内にあり』

甦らせてしまうんだ。

11すなわち復のぼりてパンを擘き、食しての ち久しく語りあい、夜明に至り遂に出でたてり。

非常に簡単に書いてあるけれども、甦らしてしまったですね。

12人々かの若者の活きたるを連れきたり、いたく慰籍を得たり。

パウロは、もうさっさっと来てしまって、若者が甦ったか、そんな事を確かめないんですね。大変なことです。ちゃんともう確信があるから。

13斯て我らは先立ちて船に乗り、

トロアスからまた船に乗った。

アソスにてパウロを載せんとして彼処に船出せり。14我らアソスにてパウロを待ち迎え、これを載せてミテレネに渡り、15また彼処より船出して翌日キヨスの彼方にいたり、次の日サモスに立ち寄り、その次の日ミレトに著く。16パウロ、アジヤにて時を費さぬ為にエペソには船を寄せずして過ぐることに定めしなり。これは成るべく五旬節の日にエルサレムに在ることを得んとて急ぎしに因る。

●エペソ教会へ別れの挨拶

17而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、

行かないんだ、自分は。

教会の長老たちを呼びて、18その来りし時、かれらに言う

ミレトでもって、別れの挨拶をする。これは、ミレトに於ける、エペソ教会の長老たちに対する訣別の言なんです。エペソに行ったのではない。これから、ずっと終りまでパウロの演説です。

『わがアジヤに来りし初の日より如何なる状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。19即ち謙遜の限をつくし、

「謙遜の限をつくし」と、非常に不思議な言い方をしていますね。非常に低姿勢でと。

涙を流し、

パウロという人は、非常に感情の豊かな人で、時々、「涙を流し」と書いてある。パウロは、知識も素晴らしいし、情も深いし、意志も強い。

パウロの、この言を読んでいると、或る人を思いだす。誰だと思うかね。賀川豊彦なんです。賀川豊彦という人は、どれほど素晴らしい人かは、皆さんは、私が後で読む詩をお聞きになると分かる。私は無教会の畑にいたから、賀川さんの話は一遍しか聞かない。一遍しか聞きませんけれども、非常に印象深かったです。賀川さんも、この人でした。

「謙遜の限りをつくした」

ユダヤ人の計略（はかりごと）によりて迫り来（き）し艱難に耐えて主につかえ、20**益となる事は何くれとなく憚（はばか）らずして告げ、公然（おおやけ）にても家々にても汝らを教え、**21**ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。**

「神に対して悔改める」とは、「神に立ち帰る」ということです。

「エイス　テオン」

「神に向かって」

「対して」というよりも、「神の中へ」という、「エイス」というのは非常に強い言葉ですから。

「われらの主イエスの中へとの信仰」

です。「対して」という日本語の言い方は、ちょっと何かピンと来ないんだ。

「その中へ信じ入る」

ことです。帰り入り、信じいることです。英語の「イントゥー」が「の中へ入る」ですね。「ビリーブ　イントゥー」という言い方だ。

いつも申し上げている通り、信仰の世界は、「仰」いでいたってダメだ。「交」わる、その中に入ってしまわなければダメだ。私は

「信交」

と書く。でなければ、本当の力は来ない。もうユダヤ人も何もありはしない。みんな同じことだと。

「神の中へと回帰し、われらの主の中へと信じ入ることを証した」

パウロの信交はそれですから。訳す人たちは、そういう凄い現実が分かっていないものだからね。

22視よ、今われは心搦（から）められて、エルサレムに往く。

いろいろな心配事があるんです。「心搦られて」と、面白い言い方をしている。縛られていることです。

彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。23ただ聖霊いずれの町にても我に証して縄めと患難（なやみ）と我を待てりと告げたもう。

パウロははっきり言うね、

「聖霊いずこにても」

と。ちゃんと聖霊の示しがきている。これから縛られたり、最後は道に殉じて死ぬと。

24**然ど我わが走るべき道程（みちのり）と主イエスより承（う）けし職（つとめ）、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には固（もと）より生命をも重（おも）んぜざるなり。**

「道程を果たさん為」ということは、テモテに当ていた手紙の中にも出てくる。

「もうこれから自分は最後だ」

と。テモテ後書に出ている。とにかく、このパウロは何といっても、キリストの第一の弟子です。大したもんだね、パウロという人は。それで、

「生命なんか、生きるも死ぬも、ただキリストだ」

と言っているんだな。ピリピ書の有名な言です。

25**視よ、今われは知る、前（さき）に汝らの中を歴巡（へめぐ）りて御国を宣伝（のべつた）えし我が顔を汝ら皆ふたたび見ざるべきを。**

「もうこれでサヨナラだ、これであなた方と会うことはない」

と。

「ヌール　アインマール、ニッヒト　ヴィーダー」

「ただ一回で、もう再びない」

と。だから、私は「訣別の辞」と書いた。遺言みたいなものだ。

●教会は十字架と聖霊による

26**この故に、われ今日なんじらに証（あかし）す、われは凡ての人の血につきて潔（いさぎ）よし。**

自分には、もちろん、人をあやめた事はないし、人の生命を奪ったことはない。血を流したとするなら、それは、他の原因によるので、その血は、反って血を流した人に責任が返るような場合が多い。この言葉は、エレミヤも、そういうことを言っている。

「私をもし殺せば、その血はお前たちに返っていくぞ」

というような言い方ですね。

27**我は憚（はばか）らずして神の御旨（みむね）をことごとく汝らに告げしなり。**28**汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、**

サタンがいるから気をつけろと。

聖霊は汝らを群のなかに立てて監督となし、神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。

「教会は十字架と聖霊による」

ということが、ここでもちゃんと分かるね。パウロのこの自覚。ブルンナーが、その点で、『教会の誤解』という本を書きましたが、

「一般の教会は、本当の現実を誤解している。ダメだ。原始の福音はそんなものではないぞ」

と、いわゆる今の教会を攻撃したものだから、ブルンナーのあの本は、教会では非常にむしろ読まれない。私は、ブルンナーさんと一緒に講演したことがあるからね、銀座教会で。本当は、もっと私はやりたかったんだけれども、ブルンナーさんが「五分だ」と言うから、しょうがないな、と。五分を少し超過したけれどもね。塚本先生が、

「いや、小池君の話は凄かったよ、未だかつて聞かなかった」

と、私にそう言ったです。

エクレシアは血をもって買われたものだ。「監督」だとか何とかは、みんなこれは聖霊が立てるので、いわゆる「教会制度」になってしまったからダメなんです。制度的な教会になったから、内村鑑三が「無教会」なんてことを言いだしたんだ。いろいろ役割があったっていいんですよ、その役割が本当に聖霊によって立てられていれば。牧師さん自身が聖霊によって立たなければ、しょうがないんだからね。無教会の流れで、どうしてもその点が欠けていたから、それで、手島さんと私が立ったら、アウトサイダーにされてしまった。ところが、我々はキリストの弟子の次元に来ている。

29**われ知る、わが出で去るのち暴き豺狼（あらおおかみ）なんじらの中に入りきたりて群を惜（おし）まず、**30**又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。**

これはまた、ユダヤ教のご連中です。ユダヤ人が巻き返しをやる、どこまでも「モーセ、モーセ」でやってるわけだ。ところが、もうモーセの世界を乗り越えている。キリストの山上の大告白は、モーセの十誡以上の世界ですから。

31**されば汝ら目を覚しおれ。**

霊眼を覚ましておれと。

三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを憶えよ。

ここにも、「涙をもて」と書いてある。エペソで3年間やっていたからね、昼夜兼行で。夜も昼も休まず。パウロの演説なんかを録音してあったら、凄いだろうね。いわんや、キリストにおいておや。だから、御霊の耳で聞いていれば、それが聞こえるわけだ。

32**われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。**

生けるキリストとその御言に委ねると、非常に強い言葉です。

御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業（しぎょう）を受けしめ得るなり。

だから、私はもう安心するぞ、ただ人間パウロによるのではないぞと。

33**我は人の金銀・衣服を貪（むさぼ）りし事なし。**34**この手は我が必要に供え、**

「この手は」というのは、パウロは幕屋造りをしていましたから。

また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。35**我すべての事に於て**

例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、
自分でしっかり働け、と。
弱き者を助け、また主イエスの自ら言い給いし「与うるは受くるよりも幸福（さいわい）なり」との御言を記憶すべきなり』
キリストから生命がくるから、力が来るから、それを与えざるを得ないんだ。福音は、人に伝えざるを得ない。
「福音を受けていて、自己満足にただ陥っている事ではダメだ、必ず伝えなくてはいかん」
と。

36**斯く言いて後、パウロ跪（ひざま）づきて一同とともに祈れり。**37**みな大いに歎きパウロの頚（くび）を抱きて接吻（くちづけ）し、**38**そのふたたび我が顔を見ざるべしと云いし言によりて特（こと）に憂い、遂に彼を船まで送りゆけり。**
使徒行伝20章17節から後半は大事なところです。

●詩「愛の使徒」賀川豊彦

これから私が読む詩は、とっておきの詩だからね。賀川豊彦。賀川豊彦は「愛の使徒」です。その点では無教会の先生方はかなわないです。（小池辰雄著『霊界の星々』１９９８年刊に収録）

神戸の運送業者、賀川純一は商売繁盛だが、家内と性格合わず、芸者益栄との間に端一と栄が生まれた。１８８８年（明治21年）7月10日に益栄こと萱生（すごう）かめとの間に、第三子が生まれた。日頃信心の豊受大神のお陰だと言って、豊彦と名付けて、かめに言った。
「この子は出世するよ、神さまの子なんだ」
不思議なことを親父が口走った。
海が近いので、この幼子は海辺で遊んだ。小柄な子だが、砂浜の相撲で遊び友達は彼にかなわない。
「お前は強いよ、だけど、妾の子じゃないか」
餓鬼どもの除け者扱いにやりきれず、彼は砂の上に坐し悔し涙。蟹を手の平にのせて、お前も独りか。こんな汚名呼ばわりがあちこちから浴びせられた。私も父の早死にのため、親父なしと悪口呼ばわりされたことがある。
彼は弟、喜敬の出生で寂しさが薄らいだが、やがて父はこの世を去った。その後で、忘れ形見の益慶が生まれた。まもなく、かめも純一の後を追う。止むなく、栄と豊彦は正妻みちの家に、弟二人は乳母のおこまの許に。何たる悲惨事、別れの辛さ。明治26年1月のこと。まだ幼年期に、豊彦は引き取られた、徳島の本家に。この正妻にど

れほどむごい目に会わされたかは、読者の推察に委ねよう。

豊彦は吉野川の葦の葉陰で蟹や田螺に囁いた、涙ながらに。桑の果をおやつにしたり、小鳥の歌に涙を拭った。学校でもいつも独りぽっちだが、成績はいつもトップ級。小遣いさんの娘のふじえだけがやさしく語りかけてくれたのが唯一の慰め。この無二の相手が知らぬ間に姿を消した。やがて、彼女が肺病で他界したとの悲しき報せ。兄の端一が、

「お前なら徳島中学に大丈夫入れるよ」

「いやだ、ぼく、もう死んでしまいたい」

ふじえの死に係わる誤解をかぶったからだ。

豊彦は優秀な成績で中学入学。二年生の時、英語教師の片山塾に。片山正吉先生はクリスチャン。彼は英語勉強のため、米国宣教師ドーガン博士のいる日本基督教会の門を叩いた。英語を学びつつ、キリストの話と博士の人格に魅せられて、キリスト教への関心が湧きだした。ドーガン博士の義弟マヤス博士の徳島本町自宅での聖書の講義に豊彦は欠かさず出席しはじめた。深い愛と強い信仰のドーガンさんは、豊彦の身の上に熱い関心を持ち、日々の祈をもって彼を覚えた。端一は親譲りの好色で破産の浮目。そのため経済支援が途絶えたが、マヤスさんは豊彦のため霊の親として具体的な支援を惜しまない。豊彦の涙はマヤスのキリスト愛で拭われた。

私は思う。妾の母かめは極めて優れた心魂の、また才色兼備の女性。古来、伝記を読むと殆ど例外がない。偉人の母親はそのような魂の優れたもの。神は道ならぬ道をもってしても、優れた女性を選んで、神の歴史に御業をなし給う。マタイ伝劈頭のキリストの系譜に、

「サルモン、ラハブによりて」

とか、

「ダビデ、ウリヤたりし女によりて」

とかあるように。

かるかやの堤から遠からぬ墓場で、豊彦は自分の運命に時おり泣き濡れるのであった。ヨブの如く、なぜ自分は生まれてきたか。生まれざりせばよかりしものをと、悲嘆にくれた。思い悩むその肩に手をおいた人がある。

「こんな所でどうしたんだね」

声をかけたは、マヤスさんの教会の先輩森茂。彼は豊彦の手をしっかり握りしめたが、軽茅の堤に向かって歩きだす。夕日が吉野川に金波銀波を漂わせている。夕空に暗い山々の影が映えている。寝ぐらに急ぐ鳥が二羽三羽声を残して飛んでいく。「夕日落ちて空暗く」の讃美歌を森茂が歌いだし、彼もこれに和した。彼の心に何か暖かい光が差した。

「神さまはお護りくださるよ」
力強い先輩の声だ。マタイ伝の
「空の鳥を見るがよい」
の聖句を付け加えた。森茂は何かしら布団包みを背負っていた。
「こんなに遅く帰るんですか」
「ちょっと面倒見て上げる人がいるのでね」
森茂とのこのタベの出会いは、彼の心に或る力と希望をもたらした。
１９０４年（明治37年）2月21日、豊彦は全生涯をキリストに献げんと決意し、徳島教会でマヤス博士から受洗した。思えば、その二週間前に私は生まれたのだった。日露戦争勃発の月、多くの青年が戦争熱に燃えている潮時に、反戦的な受洗である。これは実に彼の生涯を貫く福音の宣戦布告だ。絶対無抵抗の愛の戦いである。十字架を負う血の涙の道行である。彼は読書で敵国のトルストイを知り、その徹底した無抵抗主義に感動した。彼は、神無き社会主義ではダメなこと、神無き自由主義もダメなことを洞察。本当の霊的な中道を目指している。
旧制中学卒業前の野外訓練に際し、彼は銃を投げ捨てていた。体育の教官が、
「銃を取れ」
「いやだ、人殺しの訓練なんか受けたくない」
教官は鉄拳を二つ三つ浴びせた。豊彦はその為に鼻血を流した。
「貴様は非国民だ」
無抵抗の生徒を地面に叩き倒した。
「こいつは国賊だ」
豊彦の身体を蹴飛ばした。
叔父の森徳兵衛は彼の受洗を知って、家から出した。彼は１９０５年春、卒業はしたが何処へ。「神はわが避所」となったのはマヤス博士の許。東京市の西南部、美わしい森と丘の明治学院の高等部神学予科に明治38年春、豊彦は入学。彼は入学を歓ぶや、猛然と読書。図書館のめぼしい本を一日一冊読み通す非凡な読書力。神学、哲学、文学と広汎に渡って。重要な箇所は書きとめておく。
私も賀川先生の講演を聞いたが、メモを見ることなく、数字に到るまで自由に正確に列挙されるのには驚いた。博覧強記、文字通りの実力だ。その源泉は明治学院時代からだろう。賀川は歩きながら語りながらでも読書する。そんな言葉が友人の間で交わされる。目的に向かっての邁進だ。読書また読書。珈琲店で談話の暇などはない。彼の親友は、加藤一夫、村田四郎、佐々木邦、中山昌樹、高田銀造等で、終生不易の友情を交わした学徒。二学年の夏、徳島に帰省した時、件の先輩森茂に会いたかったが、不在。マヤスさんを訪ね、

「森茂さんが墓場のそばを通るさに、『面倒を見なければならない人が』と言ったのは何の為だったのですか」

博士は答えた。

「それはね、癩病人です。町はずれの寂しい所に小屋があるので、彼はその人を訪ね、着物を着せたり、身の回りの事をしたり、食物を食べさせたり、キリストの愛をそのまま黙ってやっていたのです。彼は戦争に招集されたので、戦地から十日に一度の煙草銭を使わずに貯めて、それを私の所へ送って、『あの癩患者が飢え死にしないようにお願いします』。もちろん、私は代わりにいろいろやりました」

マヤス博士は微笑をたたえてそう言った。豊彦の全身に火が燃えた。森茂の愛の火だ。休暇を終えて帰校した豊彦は、この火のために別人になっていた。もちろん、読書はするが、交友と親しく語る、暇をつくってチャペルで祈る、文学会にも出るし、祈祷会は熱心だ。パンに飢えている人、絶望的な病者のため涙を流して祈る賀川だ。賀川が時々姿を消すので、ある時、中山昌樹が後をつけた。学院の東の谷のボロ屋の乞食を訪ねて、豊彦はその子らに飴菓子を分けている。讃美歌を歌って聞かせる。咳をする病人に財布の小銭をみんなやってしまう。寒い寒いと言っている子に自分の着物を脱いで遣る。賀川は段々ボロ着の人になっていく。それを見かねて、ある婦人が彼に着物を贈ったところ、それも谷間の子供に遣ってしまった。

何やかと、貧民の病犬のためにまで尽くしたあげく、彼自身、血痰微熱に冒された。明治四十年の春、明治学院神学予科を卒業し、神戸神学校に転校のため白金大地に別れを告げた。秋の開校まで、岡崎教会、豊橋教会の伝道に参加した。

病身を顧みぬ働きのため、肺出血、発熱四十度。医者は絶望とみて、親類に危篤の打電せんとした。その晩、奇跡的に危機を脱して助かった。豊彦はその晩のことを後で語った。

「死を予感した。魂が次第に肉体を離れてゆく。すると、光輝く美しい広野に導かれた。パウロやパスカルが神を見て歓びに酔ったのも、こういうことだなあと思った途端に、急に地上に引き戻されるのを感じて目が覚めた」

その体験で、彼は神の特別の憫みを、死から生への呼び戻しを感謝をもって自覚した。かくて、しばらく休養の後に神戸に帰った。初秋、開校、通学の間もあらせず、病気の再発。マヤス博士は治療費、生活費の一切を引き受け、神戸衛生病院に入院させた。経過思わしくなく、明石の港病院に転入院。闘病生活、更に四カ月。やっと、退院。三河の漁村の或る家で留守番兼ねての保養生活。

「わが汝らを遣すは羊を狼の中に送るが如し。されば、蛇の如くさとく、鳩の如く素直なれ」

この聖句にはたと悟り、こう決意した。大いに読書で賢明になり、いかなる相手にも

負けるまじ。神に信頼し、あらゆる苦難を突破せん。

やがて『鳩の真似』という自伝的小説を書きあげた。石油箱を重ねて机として、古雑誌を原稿用紙として、毛筆で書いた。これを浄書して、浄書した原稿を携えて、明治学院の先輩島崎藤村を訪ねた。これを読んだ藤村は彼に送り返して、これはあなたが出世なさるまで大切にしまっておきなさい、と心からの添え書きがしてあった。藤村の言葉に従って、彼は時機を待った。

明治42年初秋、神戸に帰って、神学校のコースを続けた。マヤス博士も教授職についていた。彼の身体は過労の余波のため、今度は、悪性蓄膿症に襲われ再び危機に直面。死線を越える。危機の夢の中、今度は明治学院時代に面倒を見た皮膚病の犬が現れ、彼によりすがる。

「次郎、お前どこにいるんだ」

乞食の子らもボロを纏って現れた。癩病人も杖にすがって現れた。浮浪者や酔漢がよろめいて来る。みんな悲しげな顔つきで彼を見る。

「神さま、もう一度、私を助けてください。気の毒な人たちのために働きます」

賀川は切々と祈った。すると、これらの人々の姿が霧の中に消え去り、かくて、彼はまた奇跡的に回復し始めた。一ヵ月の後に退院したが、まもなく結核性の痔瘻に罹った。今度は、京都大学病院に入院。病床で「ジョン・ウェスレー伝」を読み、深い感銘を受け、新たに祈に入った。癩患者の面倒見の森さんの幻を見る。この病床で彼は決意した。新川の貧民窟で人間界のどん底に身をおいて、キリストの愛を身証せんことである。

１９０９年（明治42年）のクリスマスイブに賀川豊彦は木綿の筒袖姿で布団、衣類の行李、書籍と戸棚を乗せた荷車を自分で引っ張りながら、新川の貧民窟にやってきた。しかも、十軒続きの長屋の東から二軒目のボロ家の前で、人力荷車を彼は止めた。ここは貧民窟最低のアバラ屋だ。表が三畳、奥が二畳の一室で、血跡の飛び散っている模様、前年殺人の惨事があった由。その証拠は、夜に出てくる幽霊だ。そのため店子がとんとつかない。大家の曰く、これを借りる勇あらば家賃は月に二円なり。そこで、賀川は直約束。もともと棄身の人助け、キリストの愛、聖霊の身証だ。一枚一円二〇銭の古畳を三枚敷いて、荷物をやっと運び入れた。その晩はランプもなしに眠り込む。二日目の夕刻、浮浪者が三人やってきて、泊めてくださらぬかと、名乗りいでた。賀川は、ああどうぞ、と同居をゆるす。

マヤス博士からおもちゃの行李が二つ来た。クリスマス・プレゼントというわけで。子供たちを呼んで分けようとすれば、奪いあう。ダメダメ、おもちゃが壊れてしまう、目茶苦茶になるよ。耳あらばこそ、浅ましい哉。おもちゃに飢えている彼らだもの、壊したおもちゃを手にとって、それでも彼らは大満足。年の瀬の二七日、阿波屋の二

階で、クリスマスの祝をといって集めた百人ほどの貧しい人たちに手拭いと菓子袋を分け与えた。彼らは嬉し涙で、賀川と昔なじみの人のように語り会う。

その晩、合宿の植木が五円貸せと短刀を賀川に突きつける。賀川は、そんなお金はないと断る。丁度その時、林が帰ってきて、林と植木のとっ組合い。植木は引き上げたが、暴力団の園田を連れて戻って来て、その園田は賀川に縄張り荒らしだぞと詰めかかり、殴りつける。七輪を蹴飛ばし、障子をぶち壊し、刃物を手にして賀川に襲いかかったから、賀川は海岸に逃げた。夜釣りの明かりの火が見えてきた。神に新川を愛する勇気を切願し、深く祈ってキリストのみ力にあずかった。戻ると、園田はまだあぐらを書いていた。七輪の火を起こし、食事の用意をして、あるったけのものを出し、園田さんと呼びかけて、気の済むまま食べさせてやった。やくざの文句を聞きながら、自分は新川が好きなんだよ、と。賀川の本気の言葉に相手もやっとおさまった。箪笥の奥の全財産二十円をそのまま握らせた。恩にきますぜ、と一言吐くや出ていった。

すると、おじちゃんと言って入って来たのは両手の取れた人形も持った花枝という女の子。次にはいって来たのは、車輪のとれた汽車を持った熊蔵、二人とも嬉しそうにして帰って行った。二人とも目がキラキラと輝いて、先程の港の漁火のようだった。

１９１０年正月2日、狭い住処に人々を呼び集め、新年の礼拝とキリストの話をやさしくしてやった。正月の餅を全員に分けた。伝道の話よりは、みんなには餅がもていたに相違ない。花枝と熊蔵に加えて、寅一が賀川おじちゃんと仲良くなった。無邪気な彼らと遊んでいる時、思いついたは日曜学校。しばらくあって、関西学院神学部の友らが応援にやってきた。二軒おいた西隣りの六畳を借り、教会と日曜学校の会堂とした。日曜学校に集まって来たのはいいが、帰るとなると下駄や草履の混乱で、大騒ぎには「賀川てんてい」もほとほと閉口、どうしたものか。友人の助けもあって、続けることにした。神戸イエス団と命名し、友らと祈り、新川貧民窟で伝道の第一歩を踏みだした。……

いゃまぁ大変だ、これくらいにしておこうかな。これで、何十枚と書いてあります。とにかく、なかなか後は面白いんですけれども。賀川さんというひとは大変な人です。あの二十何巻の全集も、びっしり書いてある。無教会の先生方はインテリ相手の伝道でしょ。これは、本当にどん底の伝道で、キリストの愛を本当に――先程のパウロじゃないけれども――そういう事を実証した人です。これは、世界の賀川です。賀川先生は世界的に聞こえてきましたから。後から社会運動なんかをやらざるを得なくなって、いろんな活動をした。とにかく、自然科学の方面でも、ものを書いているし、大変な人です。